

ため派遣されたドティー氏の報告書に次のようなことが述べられている。中国は永年世界第一の養蚕国の地位を占めていたが、技術改良の努力をおこたってきた。それに反し日本はヨーロッパへ学者、技術者を送り科学技術の推進をはかり、養蚕、製糸についての技術向上を官民協力して行っている。中国は気候的にもまた労力が豊富な点からも、最も養蚕に適しているが、技術的な面からこれらの利点が十分生かされていない。

当時の中国の養蚕業の実体は不明の点が多いが、種々の情報を総合すると大体次のような状態と考えられる。桑園面積は60万ha前後、繭生産量は16万トン前後で、浙江、江蘇、四川及び広東の4省を中心に生産が行われており、この4省で全生産量の8割を占めているとみられる。

四川・広東の両省においては四季を通じて養蚕が行われているが、一般的には珠江流域が多化性を用いて8~9回、長江（旧揚子江）流域が2化性を用いて4~5回、黄河流域と黄河以北地域が1化性を用いて1~2回の飼育を行っている。また、桑の種類も地域によって異なり、南方では荊桑が主として用いられ、華中から華北にかけて「ろそう」、「からやまぐわ」が栽培されている。

養蚕技術については、日本にくらべて大分遅れているが、豊富な労働力を用いてそれぞれの自然環境ならびに社会、経済状態に適合した合理的な生産がなされている。

一方、品種についてみると生糸量歩合は14%前後、繭層歩合18%前後と日本で普及している品種に比べるとかなり小粒で繭層も薄い。しかし桑園面積を165万ha、繭生産量を45万トン程度にのばす年次計画がなされ、現在は世界第一の蚕糸国となっている。

第5節 養蚕業の現況と動向

第1. 世界の養蚕業の動向

2001年（平成13年）の世界主要国の繭及び生糸の生産量は、それぞれ約82万トン及び132万俵である（1-10, 1-11図）。これらの繭及び生糸は、世界の約30か国生産されているが、その主な国は中国、インドで、これらの2か国で繭については91%、また生糸については90%が生産されている。

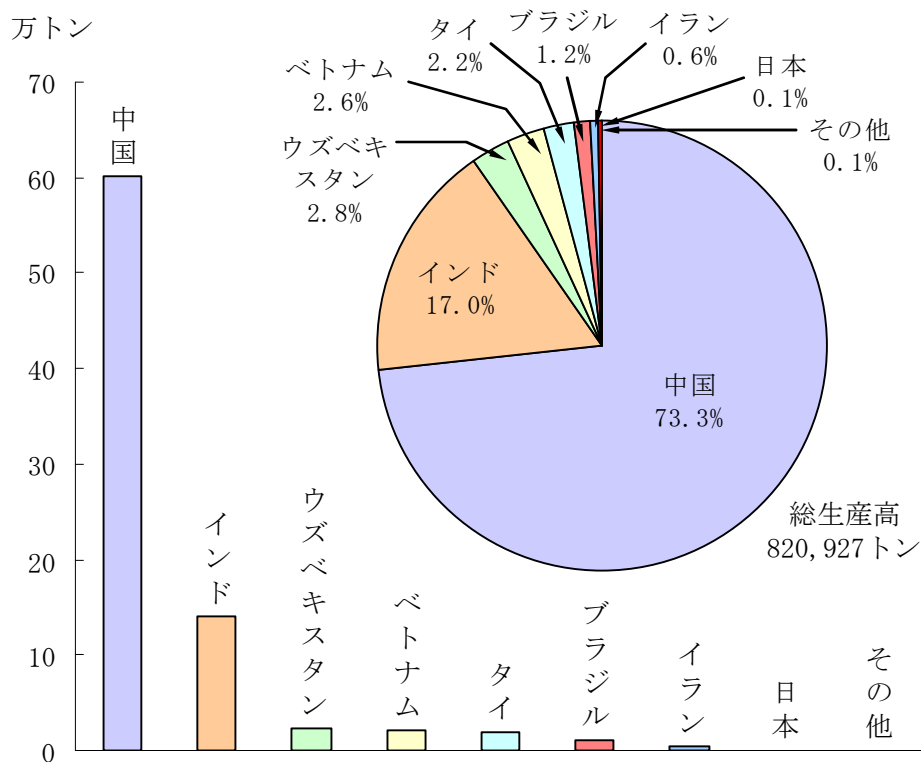
第2. 日本の養蚕業の動向

近年日本の農業は大きく変動してきたが、養蚕業もそれに伴ってその変容を余儀なくされている。特に明治以来輸出産業として発展してきた蚕糸業は、第二次世界大戦後次第に内需産業としての性格を強めながら変化し、昭和40年代の高度成長下においては、完全

に内需産業に転換した。

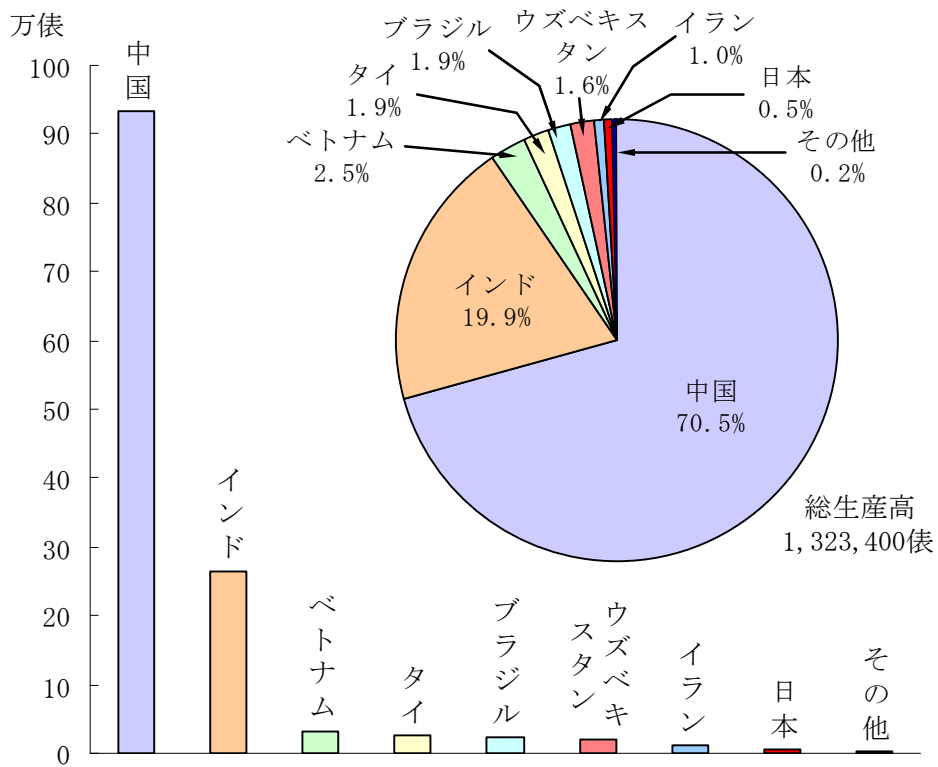
養蚕の生産性は年々向上しつつあるが、国際競争力を強化させるためには、さらに養蚕の土地及び労働生産性を向上させることが必要である。それがためには、養蚕の経営規模の拡大、養蚕団地といった生産組織の育成ならびに蚕業改良普及事業の強化をはからなくてはならない。また、試験研究を推進して、機械化、省力化をめざした技術の開発を行わなければならないことはいままでもない。

このような視点から各種の蚕糸振興政策が実施されてきたが、経済の国際化・自由化の中で中国など外国から安価な繭と生糸の輸入が激増し、それに伴って農家の手取りも例えば2,200円/kgから1,600円/kgへ下がったこともあって、蚕糸業の縮小が続いている。これに対して政府は川上（繭の作り手）と川下（糸・織物の作り手）との契約生産方式に移行する政策を平成17年から実施している。



1 - 10 図 各国の繭生産状況 (2001年)

(独立行政法人農畜産業振興機構「シルク情報」より)



1 - 11 図 各国の生糸生産状況 (2001年)

(独立行政法人農畜産業振興機構「シルク情報」より)